

最期に

レヴィ＝ストロースに『差異の二項対立関係』を手引きしたと言う、互いに生涯の友同志であった音韻学のヤコブソンは、「一人の話し手が主体となってコミュニケーションを形成するのではなく、話し手と聞き手が役割の交替を繰り返すなかで、一つのコミュニケーションを達成する。¹⁾」としており「話し手と聞き手という主体が交互に織り成す階層的なコミュニケーションを統一的に捉えようとしていた」としている。

人類、ホモ・サピエンスの脳容量の肥大、ホモ・サピエンスの進化の過程に必要な事実経過としては、母国語集団の言語使用において、言語集団構成員全体のランゲージュの駆動、言語能力の使用関係が想定されねばならないと思われた。人間達のランゲージュ（言語能力）は、話す側、意味を聞き取る側の双方で、双方向的に重ね合う駆動形態として考える事が自然であろうと思われた。

言語使用は言語表象側と、その意味を聞き取る側が同時にランゲージュを駆動して重ね合わせ、その双方向的な言語能力使用、言語集団的なランゲージュ（言語能力）の動きを必要条件として、言語音声を発する側と聞き取る側の双方が音声（パロール）を、言語音声・音素の配列関係を追いかけると言う、双方が重ね合い、双方向的同時的駆動の言語能力（ランゲージュ）がイメージされた。

独り言でさえも、自己内部で聞き合う他者、もう一つの自己が想定されるのだから。聞き合い、意味を重ね合い、揺らぎつつのコミュニケーション関係、バプチンにおける対話の構造²⁾にかさなってゆくのではないのかと思われた。

※バプチンは、自己を単一・普遍的にとらえる古典的なアトミズムの考え方に対し、自己観の形成には、他者の存在と媒介が必要であるとし、自己と他者の間での反復やフィードバック、時間・空間的要素等により、多様かつ複雑な意味が発生するとしている。そして、「差異と分化」によって、多様性が創出されるとしており、ソシユールによる規範的かつ自己同一的な言語体系と一線を画しているという。（ソシユール、1974）※6) ソシユール,F., 「一般言語学講義」（小林英夫訳）、岩波書店、1972[1922]。

バプチンのそれは、私にとっては「差異の感興が意識に届く」と言う状態へと向かう、心的

¹⁾ [08asazuma.pdf \(hokudai.ac.jp\)](http://08asazuma.pdf(hokudai.ac.jp)) P212 『スラヴ研究』No. 56 (2009) 朝妻恵里子
ロマン・ヤコブソンのコミュニケーション論 ―言語の「転位」―

²⁾ library.jsce.or.jp/jsce/open/00039/201706_no55/55-06-06.pdf

あるいは脳機能的、脳内伝達物質の動きに刻まれる経過、言語使用に係わる意識作用の流れ、集団内諸個人の意識の相互重層関係、その言語集団的な時間経過と重なりあうように思われた。

1866年にパリの言語学会（la Société de Linguistique）が、続いて1872年にロンドンの（The Philological Society）が言語起源論を禁じざるを得なかった「言語起源論」である。その言語学会が禁止せざるを得なかった「言語起源論」というべき試みのようことにはまっている私であらうと思われた。そして私はそうした道のりにおいて、自身の高齢をおもうところである。

生物種としての人類種、その種の分化の経緯には、大脳容量の増大があり、それは人類集団の総ぐるみ的な精神機能の活動が必要条件であらう。そうした精神機能の集団駆動は、言語使用、コミュニケーション過程以外には想定され難いと思われた。

人類における（時の流れ）（空間・場所の移動）・（集団と自己）（自己と他者）、それぞれの「差異の二項対立関係」への気付き。その「差異」を知り記憶する人間、時間概念、空間概念、そして「集団・自己」概念を生じせしめた存在であらうか。それらの淵源、「差異の感興」、その言語の恣意性とされる精神機能の恣意性をもって広がる様は、レヴィ＝ストロースの神話論理の読み解き、その変換過程に重なっている。。

人間の観念作用の表象としての言語表象は、恣意性において、そしてもう一方の身体性、発声運動（身体運動）上の制約を伴うという、精神機能の重層的な動きの中で、バロールを発しつつ、言語的意味の単位各「シーニョ」を分節し結合しつつ、その実践課程、そうした言語的コミュニケーションが展開されつつの、長い歴史経過として想定された。

On/off、二項対立関係としての刺激（差異の感興）を捕捉し、大脳にインプットする記号的形式、その集団的な浸透、敷衍の経過として、ポリフォニー的な音声、音素集合の母国語集団的な交換過程を通過しつつの、示唆標識としての音素の配列関係をもって、音響イメージを言語的意味に重ねる、その構成の多重層化を引き起こしつつの、言語体系を脳内神経伝達物質の反応経路集合として、大脳の肥大を引き起こしつつ、そうした引き続く言語体系の変換を続けているのが、人類の言語使用の現時点として想定する事もあり得よう。

その地質時代的な流れにおいて、言語的コミュニケーションの成立は、ラングの実働化、ディスクールの実践として、その中で言語的意味は「シーニョ」に配分され、再配置されつつ動いている。あたかも、ディスクールを願う潜在意志・想念が先行すると言った思いもふつと湧くのだが、しかしそれが近代的自我を中心に置いて、人間の精神機能を眺める近

代人的偏向なのかもしれないとも思われた。

近代的自我作用とは人類の歴史 500 万年の、ほんの皮相に開始された、人間の精神活動、その様態への考察ではないだろうか。バロールの実践課程、種のゲシュタルト、集団性は言語的コミュニケーションのベースにありつつ、その場の力動において恣意に展開しつつ、発声運動、身体運動性に限定されつつ、「差異の二項対立関係」の網の目のうち、言語の体系において、ラング（言語）はその体系を肥大せしめつつ、「差異」のみが言語世界の分類基準、メルクマールとして機能していると思われる。

それを押さえる on/of の関係、それを脳内神経電達の反応機序、生化学的な実働形態に組み込んだがゆえに、人類種総体の、ランガーージュの駆動、バロールの実践課程において、人類の言語使用、コミュニケーション過程は、種の分化過程を現出せしめ、人類は文明世界を産み出しつつ、その展開課程の現時点、言語の共時変換を抱く、現在の言語世界ではないのだろうか。

言語は、その記号的構成の故に、無限に複雑化、複層化、恣意に展開する言語の意味作用を捕捉可能な形式として、集団的な心的動態の揺れに従いつつ、捕捉しつつ、集団内の人間達の精神機能、意識作用の重ね合い、聞き合いと共に揺れ動く事ができる。あるいはそれら揺らぎとともに、人類種の社会文化の状態への移行とともにある、として想定された。

ーコロナの日々ー

コロナの三密、各国の国家は、都市封鎖（ロックダウン）を含めての防疫体制を敷いており、東京は昨 2020 年 2 月 27 日午後 6 時過ぎに安倍首相の小中高等学校の一斉休校の要請以来、度々のコロナ対策、三密・マスク・自粛の中を私達は生きている。

しかし言葉を語り、聞き合う事、音響イメージとしての「シーニョ」の括り出し、そしてそれを繋ぐ、言語的コミュニケーションとは、互いに表情はもとより、視聴覚嗅覚触覚等五感を動員しての言語表象を、遂にはディスクールとして受け取る、重合する意識作用であり、その重ね合い、交換、共有関係に思えるのだった。

三密、マスクの会話なので、ゼロ歳児の言語獲得の教室では、言語獲得が遅れてしまうとも？気付かれて、知的発達の初期に影響もきぐされつつ？ゼロ歳児の教室では、顔の表情が大切なので、マスクはやめたとか？五感を動員して意味を探りあう、そうした人間のコミュニケーション過程への障害状況としての、三密・マスクを通してのコミュニケーション過程であり、人類の社会文化性自体を狭めていく、その可能性は否めないのかもしれない？

人類の「種」としての分化・生成への駆動力というべき言語使用の歴史的過程、言語的コミュニケーション過程は、顔の表情、息遣い等も含めて、五感を動員して情報を受け取り合い、重ね合う、交流関係であり、それがコロナ禍によって遮断されている。

レヴィストロースの、自然生物から社会文化への移行過程にある人類という言説を受け入れるならば、消える事の無い響きである自然生物性、その生命原理に従い、あるいは拘束されつつ、社会文化性を重ね合う、言語の意味を括り出す生命活動の行く末が、人類の未来ではないか、などと。

三密を越えて、互いに聞き合い、意味を重ね合う日々の中にこそ、人類種の未来は継続し持続可能で有り続けると思われた。人間の抱く差異の感興を重ね合う、それが人類種の生命活動を牽引し続けているのではないか。その人類史のベース、交流関係を遮断され、それを強いられる事態のなかの、21世紀なのかもしれない。

交流し合い、言語表象を重ね合い、自然生物的生命の持続継続の願いを可能ならしめた、社会集団同士の交流を受け入れつつ、社会文化性を進めてきたであろう人類社会。それは自らの自然生物性を充足する為の、社会国家交流関係への願いを抱きつつ、それが我々人類の存在様式なのではないだろうか。 三密は人類にとって何者なのだろうか？ (2021/11/14)